2025年9月発行　これは、市民が写真文化により親めるよう実行委員会が編集・発行するものです。　vol.15

相模原市総合写真祭

フォトシティさがみはら TOPICS

25周年の今年は、昭和100年、戦後80年、そして写真表現が誕生して200年

2025年8月@市民ギャラリー 25周年記念イベントとなる 江成常夫さんと伊藤俊治さんの対談

ギャラリートークに語られた 非在の存在を可視化する 江成写真の本質

令和7年度相模原市民ギャラリー自主企画展〈江成常夫写真展〉が開催され、8月24日には、江成常夫（写真家・フォトシティさがみはら構想創案者）さんと伊藤俊治（美術評論家・フォトシティさがみはら特別委員）さんのおふたりによるギャラリートーク〈フォトシティさがみはら25周年　昭和百年への鎮魂〉が持たれました。会場には市内外からおよそ130名がつめかけ、昭和100年、敗戦から80年の歴史を写真表現によって可視化し、声なき声を聴きとって未来のための記憶に刻もうとするおふたりの姿勢は、現在のわたしたちに大きな示唆を与えるものとなりました。今回は、そのトークの一部をご紹介するTOPICSです。　※トークは動画にて公開予定です。

戦争の昭和という時空間を写真を通して問う、日本とは何なのか？

伊藤）敗戦を歴史の分水嶺とすれば、それ以前の80年は台湾出兵、日清戦争、日露戦争、満洲事変、日中戦争、海外出兵の連続でした。それ以降の80年間、平和憲法のもと日本は戦争をすることはありませんでした。しかし、僕は、実はまだ戦争は続いているんじゃないかっていうふうに思ってます。見えない戦争が続いていて、我々は100年戦争のただ中にいるのかもしれない。

江成さんは 戦後80年の節目の展覧会に込めた特別な思いがあると思いますがこの展覧会のことについて伺えますか？

江成）今回の展示は、1945年3月26日から始まった沖縄戦。地獄のような様子を呈して多くの犠牲者を出した自然洞窟（ガマ）、そこに残されている遺品の数々、さらに1945年8月6日と8月9日に原子爆弾が投下された広島と長崎の被爆者たちのポートレートで構成されています。12年間勤めた新聞社を辞めてニューヨークに行き、「戦争花嫁」との出会いを通じて、個人史のなかで日本の戦争の歴史を代弁してもらいました。それが自分探しと重なり、日本の開戦からの歴史を仕事の文脈として作家性を確立し、社会の変革に繋がる力が写真にあることを背景に置いて、ひとりだけの道を歩いてちょうど50年が経ちました。

伊藤）江成さんは、その半生を通じて、戦争の昭和を撮影し続けてこられた。戦争花嫁から中国残留孤児、満洲帝国の残影から広島や長崎の被爆、沖縄の集団自決から玉砕の島々と様々な対象物に焦点を当て、江成さんご自身の内的な衝動に駆られて取材を積み重ねられた。昭和の時空間を見つめて、点と点にすぎなかったものをつなげた写真的な実践は、日本の戦後史の隠れた構造を物語っていると思います。

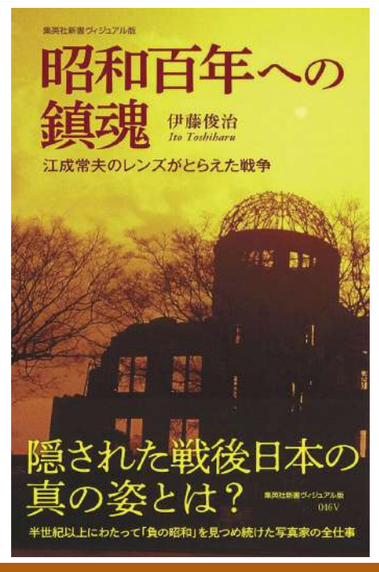
江成）僕は写真集を作る場合に聞き書きの本を先に出しています。そこで霊魂という見えない状況になっている人たちを視覚化できると気づき、教えられたのです。凄惨な現場を鎮魂もって原風景に重ねることによって亡くなった人たちと魂を重ねる。

伊藤）江成さんの写真がより重く鎮魂の意味が表現に含まれているかがわかる気がしますね。

おススメ！ 江成写真のガイドブックであり 昭和を知る歴史書であり 霊魂を凝視する思想書

『昭和百年への鎮魂 江成常夫のレンズがとらえた戦争』伊藤俊治・著 / 集英社新書

戦争とは何なのか――。撮影の動機をひとことの言葉を発する機会も得られぬまま見捨てられ放置されてきた人々の声を写真を通して語らしめ、鎮魂とする江成写真の、深く、最良の理解者である伊藤俊治さんの著書が機を同じくして発刊されました。戦争をひとりひとりの課題と捉えない限り、そのうちに別の形の戦争に巻き込まれてしまう。人間は戦争という凄まじい暴力とどう向き合っていくべきなのか？　その問いかけを江成常夫というレンズの軌跡で追ったこの『昭和百年への鎮魂』という本がひもといてくれます。



DOCUMENT! 記録！　EXPRESS! 表現！　MEMORY! 記憶！

相模原市総合写真祭フォトシティさがみはら実行委員会
事務局：相模原市文化振興課　TEL 042－769－8202